〔千葉医学　89：191 ～ 195，2013〕

〔話題〕

医学用語語源対話　Ⅲ

杉　田　克　生　　池　田　黎太郎[1)]

授業準備のため，川喜田愛郎先生の「医学概論」を読んだ中で，今日の電気生理学の開拓者デュボア・レーモン（Emil du Bois-Reymond）が紹介されていた。学生ご用達のWikipediaで調べてみると，「『自然認識の限界について』および『宇宙の七つの謎』において，人間が持つ自然認識の限界，簡単に言えば人間が持ちうる科学的な知識の限界について論じた。レーモンの立場は『我々は知らない，そして永遠に知ることはないだろう』（イグノラムス・イグノラビムス，Ignoramus et ignorabimus）という標語に縮約される」と紹介されていた。言語学的には，“L. ignoramus, we do not know,”現在形，“L. et, and”，“L. ignorabimus, we shall not know”未来形，これらの言葉は“L. ignoro, I do not know”，“L. ignorare, “not to know”という言葉から出ている。“ignorant 無知な”と言う英語と同じ系統の言葉である。“L. nosco, gnosco, to begin to know”, to get knowledge of”の否定形であり，本来“Gr. gignosco, I know”と同じ。これらは印欧語の共通語根*gno- から派生していて，“OE. cnawan, to know”，“OE. cunnan, can, G. koennen”と共通。なお*gno-,（gn-, kn-知）を基にする英語の派生語には次のようなものがある。“cognition”認知，“recognition, knowledge”，“ignore”, ignorant，“Gnostic”霊知，“Gnosticism”，“gnomon”日時計の指針，“gnome”地霊。したがって，文法的には「我々は知らないだろう，知ることはないだろう」としか訳せない。他国語で書かれた先人の主張を正確に知るためには，語源の知識は重要であることを痛感させられる。インターネットを通じた情報入手は便利であるが，正確な理解は得るためにも語源を学ぶことで，科学的知識をrecogniseする能力を高めたい。

杉田：池田先生方が紹介されてきたガレノス（「ガレノス　解剖学論集」西洋古典叢書）の影響は西洋では強く，教条主義的病気理論の型紙に合わせて現実の病人を裁断する古来の弊風に別れを告げた近代的医学者の最初のステップとして“nosography”があげられます。これは臨床症状とその経過の仔細な観察に基づく正確な疾病記述であり，ホジキン病やパーキンソン病などはこの観点から見出された疾患概念です。疾病を分類する学問として“nosology”がありますが，“pathology”との違いは何でしょうか。辞書では，“nosos”はギリシア語で「病気」，“pathos”もギリシア語で「病気，災難，感情」とあり，ギリシア人はこの2つの言葉をどのように使い分けていたのでしょうか？ちなみにホジキンは内科医でありかつ優秀な病理医でもありました。

池田：ギリシア語の原義は次のとおりです。“Gr. nosos; sickness, disease, malady”，“pathos; anything that befalls one, a suffering, misfortune, calamity”であり，pathosの　方が広い意味を持っています。それが-logyと組み合わさると，“nosology; the science of disease, the classification of disease”，“pathology; the science treating of disease ＜ L. pathologia; study of disease”という

千葉大学教育学部基礎医科学
[1)] 順天堂大学名誉教授
Katsuo Sugita and Reitarou Ikeda: Dialogue on the etymology of medical terms Ⅲ.
Faculty of Education, Division of School Health, Chiba University, Chiba 263-8522.
Juntendo University, Tokyo 113-8421.
Phone: 043-290-2628. Fax: 043-290-2637. E-mail: sugita@faculty.chiba-u.jp.

ように意味が発展して使われるようになります（Klein's Comprehensive Etymological Dictionary）。この用法の相違は医学における便宜的な区別であり，言葉本来の意味の相違に基づくものではないようです。それを継承して日本語でも“nosology”は「疾病分類学」と訳されますが“nosological”は「疾患分類学の」と訳されていますからたぶんに便宜的な相違でしょう。また“pathology”は「病理学」であり，“pathological”は「病理学の，病的の，異常の」と訳されています（ドーランド Medical Dictionary　廣川書店）。それゆえ，ギリシア語の語源とそれを用いた合成語，またその日本語訳との間には必然的な厳密な対応関係は無く，その場に応じた訳語が作られて普及したものと言えるでしょう。

杉田：前回“schizophrenia”に関する説明をいただきましたが，精神科関連用語は昨今の差別語改訂にともない変更されてきています。たとえば“dementia”は以前には「痴呆（症）」の訳語がされていましたが，最近は「認知症」なることばに変わりました。ただし語源学的には原意から離れることが大変危惧されます

池田：“dementia”は“L. dementia, insanity, madness, folly”に由来します。“de-”という接頭辞は“motion down from or away”を，“demens”は“out of one's mind, senseless, reckless”を意味します。だから“dementia”は理性や判断力の低下，喪失をあらわします。その訳語として従来は「痴呆症」と言うことばを用いましたが，これが差別語であるというので，「認知症」と言うようになりました。しかし正確には「認知障害」というべきでしょうが，これもまずいと思うなら「認知・障碍」「認知・不全」「認知・不能」などが考えられます。

杉田：ギリシア語，ラテン語の接尾辞特に“-sis”について前回伺いました。漢字の造語力も強く，例えば「○○症」，「○○病」と称して症状名や診断名がつけられます。ただし「症」は本来状態を表すので，「認知」の状態を病態とするのには個人的には違和感を覚えます。“neurosis”も「神経症」と訳出している一方，“neuropathy”は「神経炎」と訳出します。本来は“neuritis”が「神経炎」ですが，両者混在状態です。一方“diabetes mellitus”は「糖尿病」ですが，“diabetes insipidus”は「尿崩症」といいます。語源的に説明をいただいた上で，これらの訳語についてご意見をいただけますか？

池田：“-sis”は“action, process, state, condition”を表す接尾辞です。母音と結んで（-asis, -esis, -osis, -iasis）となります。“Gr. -sis = L. -entia（E. -ence）”です。“-pathy”は“Gr. pathos, disease，病的状態，疾病”を表します。“-itis 炎症”を表す接尾辞として用いられていますが，本来は形容詞の接尾辞です。ギリシア語の“nosos 病気”と共に用いられて初めて病名になります。“nephr-itis”は“nephronのnosos, disease of kidney”すなわち「腎臓の病気」ですが，それが特化して「腎臓の炎症」となりました。“diabetes”についてですが，“diabetes, a disease characterized by excessive discharge of urine”「尿の放出過剰の病気」です。語源は“Gr. diabetes, that which causes a going through”で，これを尿の症状にあてはめれば，上記の病気になります。“diabetes mellitus”は上記のことばに“mellitus”が付いたものです。“L. mellitus, honeyed, sweet as honey, “L. mel, honey”, “L. mella, mixture of honey and water”などです。

“L. diabetes insipidus”はホルモンの異常のために，尿細管の水再吸収不全が起きて，その結果「尿を多量に放出し強い口の渇きが現れる病気」だと記してあります。しかしその尿が「甘い味がしない尿」であるとは知りませんでした。古代から内科医は診断の手法として尿の色や臭いを重視していましたが，熱心な医師は味も調べたようです。それ故「味のしない尿」の病気にも注目したのでしょう。“L. L. insipidus

= L. insapidus, tasteless”です。“L. sapidus, savory, tasty ＜ sapere, to taste; ＜ sapio, to have the flavor of, taste of, to understand, be wise, to have knowledge of”つまり“sapio”「味を知ること」即ち「知識を持つこと」になる訳です。なるほど“homo sapiens”「知識を持つヒト」となるためには「味わいを識別出来るヒト」であることが必須要件であることがこれで分かりました。これは私にとっても新発見でした。

杉田：英語の“taste”には「好み，嗜好」だけでなく「審美眼」の意味がありますが，“舌による識別能力，違いを感じる力”から派生したと思われます。本来動詞“taste”は「手で触れる，試す」が原意で，その後舌や口蓋で触れることによって試すことになり，“test”も本来は「試す」が本意です。検査が増える一方触診など理学所見がおざなりだと指摘される昨今ですが，日々行う手探り診断の重要性をこれらの語源の意味から再考したいものです。医師ではLittréという語学の天才がいまして，ギリシア語，ラテン語なんでもできたそうです。インターンであるアンテルヌ（interne）までやりましたが，父の死後家計を助けるために頼まれてヒポクラテスの翻訳をしました。そのお金で生活ができ，有名にもなり医者をやめて辞書をつくるようになったそうです。フランス語の辞書の中で最高の辞書とされています。医学用語に関連しては，失語症を示す“aphasie”という言葉を作りました。トルソー徴候で有名なTrousseauの作語といわれていましたが，実際はLittréがTrousseauに提案したのが事実のようです。従来Brocaが“aphémié，失語症（aphemiaのフランス語）”なる用語を使っていましたが，“aphémié”は“infamie,汚辱”に通じるからとして代用語として“aphasie”なる用語を作成し，現在に至っています。普段何気なく使用している用語の中には，言語に長けた医師の貢献があります。

池田：“aphemia”は“a kind of aphasia, a-negative, +Gr. pheme, voice which is related to phanai, to say, speak”，一方，“aphasia”は，“loss of the faculty of speech, a-negative, +Gr. phasis, speech, derivatives, aphasiac, aphasic, aphasiology”，（以上，Skeat's Etymological Dictionaryより）です。またドーランド著，「医学大辞典」によると，“aphasia, a-neg.+Gr. phasis, speech”“失語症Broca's aphasia,［皮質］運動性失語症”，“Broca's amnesia ブローカ健忘症”，“Wernicke's aphasiaウェルニッケ失語症”とあります。“aphasia”の本来の意味は“voice-less, without word, loss of speech”であり「言葉が口から出てこない」症状を言うようです。その原因はと探求すれば種々考えられますが，“un-fame, infamy”と言う説明は見あたりませんでした。ギリシア語の“feme”にも‘voice, speech, saying’はありますが，「名声，評判」という意味はありません。ラテン語の“fama”には「名声，評判」の意味がありますから，Littréはそのことを心配したのでしょう。現代ギリシア語の大辞典（William Crighton）では“aphasia, speechlessness, muteness, aphasia”と説明してあります。これは西欧の用語の逆輸入です。しかし“pheme”では“fame, reputation, renown”となっていて，‘voice, speech’の意味はありません。これは古典の用法とは異なっているので，ラテン語以後の影響を示しているものとおもわれます。現代ギリシア語はまったく西欧の影響下にあり，古典の知識も英独仏からの逆輸入です。その一端を上の例でもうかがい知ることができます。

杉田：古典と言いますと“classic”という言葉が思い浮かびます。“classic”とは“calss”icで，本来教室で教えるべきものが古典なのだと紹介した文章がありますが，本当でしょうか？先生のご意見をお聞かせいただければ有り難く存じます。

池田：“classic”についてこれも語源辞典によると“classic, L. classicus, relating to the

classes of the Roman people, esp. relating to the first classs”とあります。共和制におけるローマでは，政務官の選出や重要な法案はケントゥーリア民会という軍事的な集会の会議で決定されていました。しかしそれは武装を自弁できる資産の額によって6階級に分類され，最高階級は馬とその装備を調えることができる騎士身分が占めていました。そして議決は挙手による多数決でその多数がその階級の意思を反映するものとされ，上の階級の意思を順次確認するのですが，投票数の過半数は上の3階級が占めているので，最下級の意思を確かめることはほとんどありませんでした。さらに第7階級ともいうべき無産階級は軍事的には国家に寄与できない階級，すなわち子どもを産み増やす以外に能力が無い者達とさげすまれました。その階級は「proles子孫」階級と呼ばれましたが，“proletariat”という後世の用語はこれに発しています。さて“classicus”と言う言葉には，このような明暗の背景をこめた「最高級」という意味があります。書物が長い歴史の中で選択されて書き写され，保存されて来る過程で本当に最高級の作品だけが今私達に伝えられていると思います。教室で教えられる古典的な書物というのはその結果です。

杉田：千葉医学に語源対話が連載され，いくつか語源の問い合わせがありました。“sepsis”の日本語訳がなぜ「敗血症」なのかご教示願います。また救急医学関係では“shock”や“anaphylaxis”への対応が重要ですし，原因としてのアレルギーやアトピーについても語源解説をお願いいたします。

池田：“sepsis, Gr. *σηψις*, sêpsis, putrefaction 腐敗”が語源ですが，“septic-emia,（-em-, blood,）腐敗血”を，「敗血」と縮めたのでしょう。類例では，“sapro- 腐敗”，“saprogenic, 腐敗性の”，“saprophyte死物寄生植物”，“aseptic無菌の，防腐性の“asepsis無菌”，“antiseptic殺菌（抗腐敗），“antisepticize殺菌する”などがあります。“anaphylaxis”は「過敏症，過大なアレルギー性反応」の意です。C. Richetの造語で，“phylaxis, watching, guarding, defence of the body against infection”に対して“anaphylaxis, ana-, back”は期待される防衛反応の代わりに「過剰な逆の反応」を示すことからの命名です。“shock”は，“ME. schokken, Du. shokken, OHD, jolt, swing, shake”でゲルマン系の言葉です。アレルギー“allergy, allos, other＋ergy, work”は，「本来果たすべき作用とは別の作用や反応を起こすこと」を意味します。アトピーは“atopy, Gr. atopos, out of place（topos, “place”）”であり，「場違い」な「期待されない反応」という意味です。ちなみに「理想郷」の意の“Utopia”は，“outopia, no place, nowhere”が本意です。“Gr. eu-, good＋topos”なら「良い場所，正常部位」になります。「正常分娩」は“eutocia, good birth”です。

杉田：アレルギーに関係する細胞を“Mastzellen”と命名し，日本ではこれを「肥満細胞」と訳していますが，訳は正しいでしょうか？「コイロサイト」なる細胞があり，これはヒトパピローマウイルスに感染した細胞の核周囲が明るく抜けて見えるためそう呼ばれるとあります。ひとによるとこれこそ「肥満細胞」と呼ぶべきとされますが御意見をお願いいたします。

池田：“Mastzellen”は“Mastzelle”の複数形，“Mast肥育”は“mästen肥育する”から作られた名詞，“Mastkur”は「肥満療法」です。“coelocyte”については，“Gr. *κοιλος*, koilos, hollow, hollowed, cavity”これが語源ですが，ギリシア語の“koil-”は“coil- coel-”と書き改められます。“coele, a body cavity, chamber”で，類例として“coelacanth, シーラカンス，棘が空洞になっている古生物の深海魚”，“coelenteron腔腸”，“coelenterata腔腸動物”，“coelomate体腔動物”，“papilla, nipple, teat 乳首，乳頭”，“papilloma 乳頭状の突起，疣”です。これらの類例から考察すると“coelocyte”は「有腔細胞，空洞

細胞」と訳すことができます。

杉田：アレルギー関連の用語がいくつか出てきましたが，ちなみに免疫学上側鎖説を提唱したエールリヒもラテン語やギリシア語に長けていました。薬剤と組織の特異的化学結合を生命力の実相と考え，“Corpora non agunt nisi fixa (sunt).”「物，結合せざれば作用なし」というラテン語での概念を提唱しました。“Corpora”とは「物」なのでしょうか？

池田：“corpora”は“corpus, body, matter, substance物質”の複数形で，「物質は結合（固定）されなければ働かない（機能しない）」という内容であると思います。“figo, figere, fixi, fixum”と活用するので，“fixa”となります。この“L. figo, to fix, fasten, affix”という動詞から“fixate, fixation, fixative”という英語が派生しています。

杉田：今回紹介したもの以外にも医学用語の中には，ラテン語やギリシア語の素養を有する医学者が創案したものが数多くあります。新たな疾患や病態を見出し，語源をもとに世界に受け入れられる新たな名称を提案していきたいものです。

文　献

1）岩田　誠，河村　満，酒井邦嘉，西谷信之．Leborgne報告から150年－人間の本質をみつめたBroca. Brain and Nerve 2011; 63: 1361-8.

本文での略語: L: ラテン語，Gr: ギリシア語，OE: 古英語，G: ドイツ語，E: 英語，L. L: 後期ラテン語，ME: 中英語，Du: オランダ語